

主 題：霊的リーダーのあるべき姿：監督とその資格⑧

聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章6-7節

テーマ：聖書の教えている霊的リーダーとはどのような存在か

今朝、皆さんと続けて見ていきたいみことばはIテモテ3章です。聖書をお持ちの方はどうぞお開きください。私たちは霊的リーダーのあるべき姿、特に監督とその資格についてこれまで7回に渡って考えてきました。でもそれもきょうで一区切りです。きょう皆さんと一緒に6-7節を通して監督の最後の資格を学んだら、来週からは執事について、執事とはどのような存在なのか、またその資格とは一体何なのかを8節から学んでいきたいと思えます。えっ？と思われた方もあるかもしれません。つい先日、ある方に「このシリーズももう少し、7節で終わりですね。」と声をかけられました。皆さん、忘れておられるかもしれませんが、このシリーズは3章全体を見ていくので、続けて霊的リーダーの大切さについてともに考えていきたいと思えます。

これから私たちは、残された二つの監督の資格を見ていきますが、その前にここまで学んできた内容を今一度思い返してみてください。これまで私たちは13個の資格を見てきましたが、皆さんは聖書がどのような人物を教会の霊的リーダー・監督として求めているのかが、以前よりもはっきりと理解することができてきたでしょうか？振り返ってみれば、まず、最初の資格として私たちが見たものは「非難されるところのないこと」でした。監督はその歩みのうちに、周りの人から責められ続けるような明らかな罪や問題が見出されない人物であることが求められていました。二つ目の資格として挙げられていたのは「ひとりの妻の夫であること」でした。監督はキリストが愛を示されたように心から自分の妻を愛し、性的な聖さを保つ人物であることが求められていました。三つ目の資格として挙げられていたのは「自分を制すること」でした。監督は自分の欲求や感情、周りの状況といったものに振り回されたりすることのない慎重な人物であることが求められていました。四つ目の資格として挙げられていたのは「慎み深いこと」でした。監督は置かれた状況にあつて主に喜ばれることが何なのかを考え、みことばから冷静な判断を下すことができる人物であることが求められていました。五つ目の資格として挙げられていたのは「品位があること」でした。監督はその生き方がみことばによってきちんと整えられた、人々から信頼や賞賛を受けるような人物であることが求められていました。六つ目の資格として挙げられていたのは「よくもてなすこと」でした。監督は親しい人にだけでなくすべての人に対して、普段、愛やあわれみというものを示す関係にはないような見知らぬ人に対しても、犠牲を払ってその人の必要を満たそうとする人物であることが求められていました。七つ目の資格として挙げられていたのは「教える能力があること」でした。監督はみことばの真理をわかりやすく人に伝え、その真理をもって羊を導いたり、敵から守ったりすることのできる、教える賜物を持った人物であることが求められていました。八つ目の資格として挙げられていたのは「酒飲みでないこと」でした。監督はお酒に支配されるのではなく、自分を正しく制することができる人物であることが求められていました。九つ目の資格として挙げられていたのは「暴力を振るわない」ということでした。監督は自分の思い通りにならないことがあれば、怒りや憤りに任せて仕返しするのではなく、自ら進んで赦しを実践する人物であることが求められていました。10個目の資格として挙げられていたのは「温和であること」でした。監督は自分の権利をいつも主張するような者ではなく、どんな相手であろうと忍耐を持って親切に接する人物であることが求められていました。11個目の資格として挙げられていたのは「争わないこと」でした。監督は人との争いを避け、平和を築くことを熱心に追い求める人物であることが求められていました。12個目の資格として挙げられていたのは「金銭に無欲であること」でした。監督はお金を愛する者では

なく、神様を何よりも愛し、この方のうちに満足を見出して歩む人物であることが求められていました。そして13個目の資格として挙げられていたのは「自分の家庭をよく治めること」でした。監督は家族の先頭に立って犠牲的な愛を持って世話をする、そんな人物であることが求められていたのです。

こうしてみことばは、神の教会を導いていくリーダーに対して、家庭や周りの人との関係、また自分自身の歩みに関する事など、具体的で明白な霊的基準というものを設けていました。教会全体の模範となる監督というのは、非常に大きな責任を負っていたのです。だからこそ、まず何よりも、私を含め教会の長老たちひとりひとりが、このすべての面において主の前を忠実に歩んでいるかという基準に照らし合わせながら吟味するということが必要でした。

しかし同時にこれらの基準は、成熟を目指している私たちひとりひとりが追い求めていく目標でもありました。私たちひとりひとりの目標だったのです。そうだとすれば、みことばの教えている霊的に成熟した者の姿というものがどのようなものなのか、また自分自身がどの部分においてその姿からかけ離れているのか、どこに弱さを覚えているのかも以前よりははっきりと見えてきたでしょうか？

きょうは残された最後二つの資格を6-7節から見ていきますが、これらの資格も自分の歩みと照らし合わせながら考えていきましょう。そしてもし、成長しなければならない部分が自分のうちにはっきりと見せられたのなら、みことばがそれを教えてくれたことに感謝して、主の助けにより頼みながら、目標を目指してともに歩んでいきましょう。では早速ですが、きょうの内容を実際に見ていきたいと思うので、いつものようにまずみことばを読みします。

#### I テモテ3 : 1-7

「:1 人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということばは真実です。:2 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、:3 酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、:4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。:5 ——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう——:6 また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。:7 また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。」

#### ○監督とその資格⑭：信者になったばかりの人でない 6節

監督の15個の資格としてパウロが14個目にあげていたもの、それは「信者になったばかりの人でないこと」でした。6節にそう書かれていました。「また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。」

##### 1. 定義

では、信者になったばかりの人とは、そもそもどのような人物のことを指しているのでしょうか？

「信者になったばかりの人」（ギリシャ語：ネオフタス）

この「信者になったばかりの人」ということばは、もともと「新しい」とか「未熟な」を意味する“ネオス”と、「成長する」「生まれる」を意味する“フォ”の二つのギリシャ語が結びついてできていることばです。そしてこれら二つを組み合わせ、「新しく生まれた」「まさに成長を始めた人」そういったものを表しているのです。新しく生まれた人…要するに信者になったばかりの人というのは、キリストによって救われ、新しい歩みを始めたばかりの人、霊的に未熟な人物だということです。まだ神様のことも、みことばのことも、自分自身のことすらもほとんど何も知らないような、信仰の赤ちゃん、霊的な成熟さに欠けている者を指していました。そしてそのような信仰の若い人、もっと言えば、まだリーダーになる準備が全然整っていないような人が教会の監督にはならないようにと、パウロはここで訴えていたのです。たとえ、どれだけその人にすばらしい才能や能力があったとしても、どれだけその

人がキリストに熱心でみことばを求める人であったとしても、救われて間もない人を教会のリーダーには選ぶことがないようにと。

## 2. 危険性

では、なぜパウロは救われて間もない人を教会のリーダーにすることを“よし”とはしなかったのでしょうか？霊的に未熟な者が監督になることには、どんな問題があるのでしょうか？パウロはどのようにそれが危険なことなのか、その理由を6節の続きに記していました。6節の後半部分に「高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。」とありました。なぜ未熟な者が監督になるのが問題なのか？簡潔に言えば、それは霊的に幼い者が監督に選ばれることによって、その人のうちに高慢さが生み出される危険性があるからでした。ここで皆さんに注目してほしいのが、「高慢になって」と訳されていることばです。これは非常に興味深いことばで、このことばの語源には「煙」という意味があります。煙です。そしてここから「思い上がる」とか「うぬぼれる」「高慢になる」といったふうに使われるのです。この「煙」と「高慢さ」というこの二つの関係は非常にわかりやすいと思いませんか？プライドにあふれている人とはどんな人ですか？そのような人は、自分自身の考えや思いで膨れ上がっていたりします。自分の価値観こそが正しいとうぬぼれていたり、何よりも自分のことが一番だと自分のことを優先するあまり、現実が見えなくなっていたり、正確な判断ができなくなっていたりするのです。まるで煙がその人の視界を覆って先が見えなくなっているかのように、高慢な人というのは、自分のプライドが妨げとなって見るべきものが見えなくなっているということです。プライドというものは煙のように、見るべきものを見えなくさせると。またもっと言えば、プライドというものは、私たちがいつも覚えているべき神様を忘れさせるようなものだ、とみことばを教えています。だからこそ危険なのです。申命記の8：14を見てみるとこのように記されていました。「あなたの心が高ぶり、あなたの神、主を忘れる、そういうことがないように。…」と。だからこそ、パウロはその危険性をよくわかっていたのです。霊的に未熟な者がリーダーになるというのは、高慢さを生み出してしまうと。だから、霊的に未熟な者がリーダーになることを“よし”とはしませんでした。

もちろんこのプライドというものが未熟な者だけに關わる問題ではないことはもう明白です。でも未熟な者にとってプライドというものが非常に厄介な問題だということも、私たちは想像できると思います。例えばもし、みことばや正しい神学をほとんど知らないような人が教会のリーダーになったら、どうなると思います？そのような人は、みことばから導いていくべきなのにもかかわらず、みことばを知らないために教会の群れを正しく養うことができないばかりか、間違った教えをばらまいて、その群れのうちに混乱をもたらしてしまうかもしれません。また、教会のリーダーとは一体何なのか、教会のリーダーに与えられた責任が何もわかっていないような、救われて間もない人をリーダーにしたとすれば、その教会は、またその人はどうなると思います？その人は、自分は特別なんじゃないか、自分には人に仕えるということより仕えられる権利があるんじゃないかと、そのような高慢な考えに陥ったりするのです。そして神様に信頼するのではなく、自分の知恵や力に頼って好き勝手なことをするのです。高慢な思いがその人を支配すれば、その人は神様を忘れ、自分こそが一番なのだと考えるようになります。そんなプライドこそが、まさにあのサタンがさばきを受けることになった最初の罪でもありました。

思い返していただければ、イザヤ14：12-15に「：12 暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。：13 あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。：14 密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』：15 しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」サタンが望んだこと、それは、神様のようになることでした。自分は神様によって造られた被造物であるということを忘れ、高慢になったサタンは自分が一番になるということを求めたのです。しかしその結

果、サタンはその地位を手にするのではなく、代わりによみへと突き落とされました。プライドは神様が必ず正しくさばかれ、サタンにはそれによって正しいさばきが下ったのです。それと同じように、プライドにあふれたリーダーにはさばきが下る、ということをパウロはよく理解していました。だからこそ、未熟な者が高慢になってさばきに合わないよう、そのような者を監督に選ばないようにと求めているのです。このように考えたときに、教会の霊的リーダーにとってプライドというものと、その反対の謙遜というものは非常に大切なものになります。プライドと謙遜は非常に大きな問題でした。

### 3. 適応

でもこの資格もこれまでと同じです。確かにすべての者が監督になるわけではありません。しかし、みことばから見たときに、私たちひとりひとりも高慢な者ではなく、へりくだった者として歩んでいくことが求められていました。例えばピリピ2：3を見れば、パウロはこのように言っていました。「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」またみことばは、神様がプライドを忌みきらわれているとはっきり教えていました。箴言16：5を見るとこうあります。「主はすべて心おごる者を忌みきらわれる。確かに、この者は罰を免れない。」プライドというものは神様が忌みきらわれるものなのだと、私たちは高慢な者ではなくへりくだった者として歩んでいかなければいけない、とみことばは繰り返し教えていました。

そうであるなら、今私たちはそのような歩みをしているでしょうか？私たちは今プライドにあふれた高慢な者として生きていないでしょうか？それとも謙虚な者として成長しているでしょうか？考えてみてください。だれかから罪や過ちなどを指摘されたときに、私たちは普段どのようにふるまうでしょうか？兄弟姉妹が皆さんのところにやって来て、「あなたの行っていることは間違っています。」と戒められたり正されたりしたら、皆さんはどのように応答するでしょうか？その相手に対してすぐにむっとして怒ったり、その人のことばに耳を傾けようとしませんか？それとも、その人の話がたとえ厳しいものであったとしても、しっかりと向き合おうとするでしょうか？また、だれかが、自分では今まで見えていなかった過ちを見出して、みことばから「間違っていますよ。」と私たちに指摘したなら、私たちは普段、その人にどのように応答するでしょうか？「じゃ、あなたはどうなんですか、あなただって同じことをしているじゃないですか！」と言ってすぐに責任を転嫁しないでしょうか？その人の指摘に耳を傾けることよりも、責められている自分自身を守ろうとして、すぐに相手のことを責めないでしょうか？もしくは、「いや仕方ないんですよ、みんな失敗するのだから。そんなに目くじらを立てて怒らないでください。」と自分自身の過ちを正当化しようとしませんか？それとも、その人が自分の見えていなかった弱さを教えてくれたことに感謝するでしょうか？謙遜な人物に関して私たちはいろいろなことが言えますが、大切なこととして一つ言えることは、謙遜な人物は、自分自身がすべてのことを見えていないということを知っている人物です。謙遜な人物というのは、自分には見えていないところがあるということ、自分には気づいていない罪やプライドというものがあるということを知っているのです。

プライドが持っている問題について、CSルイスもこのように語っていました。皆さんのレジメにも載せましたがこのように記されています。「傲慢ほど人の評判を悪くするものはなく、またこれほど自分のうちにあっても気づきにくいものは存在しない。しかも、その傲慢を自分の内に持っていれば持っているほど、それに比例して相手の傲慢を私たちは嫌悪するのだ。」彼が言いたいことはわかりますね。人のうちに潜んでいる高慢な思いというのは、私たちには非常にわかりにくいものだということです。プライドというものは煙のように視界を曇らせるものだからこそ、私たちは自分のうちにあるプライドに気づかないことがあります。でもそれがよく見える時があるのです。どんな時かわかりますか？その一つは、だれかが皆さんのところに来て、罪や間違いを指摘するときです。そのときに私たちが持っているプライドというものが明らかになります。例えば、ある人が自分の考えは正しい、だれからも

指摘されたくないと思っていたら、その人物はどんな行動をとると思いますか？その人がすることは、自分の周りに自分と同じ考えの人を置いたり、自分の聞きたいことだけを語ってくれる人と一緒にいようとすることです。自分の行っていること、考えていることがいつも正しいと言ってくれるような人を求めるようになるのです。間違っているなんて言うことは聞きたくない、自分のことを肯定してくれる人を周りに置いておこうと。でも私たちがみことばを見れば、みことばはそれがプライドなのだを教えていました。二つの箴言を見ますが、箴言 21 : 24 では「高ぶった横柄な者——その名は「あざける者」、彼はいばって、横柄なふるまいをする。」次に箴言 15 : 12 のところでは「あざける者はしかってくれる者を愛さない。知恵のある者にも近づかない。」とはっきりと書いていました。高ぶった横柄な者はあざける者だと、その者はしかってくれる者を愛しないと。そして、知恵のある者にも近づかないと。どうして高慢な人はこんなことするのだと思いますか？どうして知恵のある人に近づいていかないのでしょうか？それは自分の考えや価値観といったものをだれかに間違っているとは言われたくないからです。そうだとすればどうでしょう？私たちは自分自身の間違いをみことばから教えてくれる人を求めているのでしょうか？みことばから真理を私たちに教えてくれて、キリストに似た者へと変わるその助けを与えてくれる人をいつも求めているのでしょうか？それとも、いつも自分の歩みを肯定してくれる人を求めていないのでしょうか？もし自分の歩みに間違いを指摘してくれるような人がひとりもないと言われる方があるなら、なぜいないのかをよく考えてみてください。心のうちにそのような人物を持ちたくないとか、自分には必要ないとの思いを持っていないのでしょうか？自分の間違いを指摘されたくないという思いがあるなら、みことばは、それはプライドだ、とそう言っていました。確かに私たちが成長していくために、神様に信頼して歩むことも、祈ることも当たり前のように大切なことです。でも同時に、愛を持って自分が見えていない弱さを罪を教えてくれる兄弟姉妹という者も必要です。自分の気づいていない罪を、みことばから示してくれるような人というのは欠かせないのです。そしてもし、皆さんのもとにだれかがやって来て間違いを指摘してくれるようなときがあれば、そのような人は神様から与えられた祝福だ、と覚えることです。私たちはいつも逆を思いますね。そのようなことを言ってきた人に関して、いえいえ、そんなものはいらないと。考えてみてください。皆さんの中に、だれかのところに行って間違いや罪を指摘することが大好きですと言われる人はいますか？いないですね。私たちはそれがどれほど難しいことなのかをよくわかっています。どれほどそれが大変な犠牲を伴うのかということをよくわかっているのです。そうだとすれば、自分のところにだれかが来てみことばから間違いを告げてくれるなら、その人が皆さんのことをどれほど愛しているのか、どれほど勇気を持ってそれを行っているのかを覚えて感謝することです。そしてその人に罪を指摘されるなら、みことばから「間違っています」と言われるのなら、素直にその人のことばに耳を傾けることです。確かに罪や過ちと向き合うということには痛みを伴います。だれしませんが、「あなたは間違っています。」なんて言うことを聞きたくないと思います。でも、だからこそ、私たちはへりくだるといえることが大切になるのです。

私たちはいつも私たちの主の姿を覚え続けることが大切です。ピリピ 2 : 6 - 8 にこうありました。「:6 キリストは、神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。:8 人としての性質を持って現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」キリストは王の王、主の主でした。この方こそが、すべての者によってほめたたえられ、すべての者によって仕えられるべきそのようなお方でした。しかし、この方は私たちをその罪から救い出すためにご自分を卑しくし、仕える者として地上に来られたのです。王である方が仕える者としてこの地上に来られ、そして実に十字架の死にまでも従われたのだと。しかもそれだけではありません。この方は、本来私たちが受けるべきその罪の罰を負って十字架の上で苦しめられました。このようにして、キリストはへりくだられたのです。このようにして、へりくだりの模範を私たちに示してくださいました。キリストが十字架の上で死んでくださらなかったとすれば、今

の私たちには何の希望もありませんでした。罪の中に死んでそのままでした。ただ、神の御怒りを待つだけの者でした。でも、この方が十字架で死に三日目によみがえってくださったからこそ、私たちは今この方であって罪の赦しを得、新しくこの主のために生きていく者として変えられたのです。罪の奴隷として生きていた者たちが、義の奴隷として生きていくことができるように変えられました。それは、この主がへりくだってそのような救いを私たちに与えてくださったからでした。この方の愛を、この方の模範を私たちが知っているなら、私たちの責任はこの方の模範に倣ってへりくだって歩むことです。もしだれかに自分の罪が指摘されるようなことがあるなら、そのことを主に感謝することです。「私がいまますます主に喜ばれる者になっていくために弱さを見せてくださった、だからどうか私を変え続けてください。」と、そう祈りながら歩み続けていくことです。それができる者として変えられたのです。へりくだって歩いていくこと、パウロが14個目に挙げた監督の資格「信者になったばかりの人でないこと」でした。

### ○監督とその資格⑮：教会外の人々にも評判の良い 7節

そして最後、監督の資格として15個目に挙げていたもの、それは「教会外の人々にも評判の良い人であること」でした。7節をもう一度見てください。「また教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。」

#### 1. 定義

教会外の人々にも評判の良い人とは具体的にどんな人物を言うのでしょうか？大きく二つに分けてこのことばを考えてみたいと思います。まず、最初に出てきている「教会外の人々」ということばは、「神の家に属していない人々」のこと、つまり「未信者」のことを表しています。パウロは別の箇所でも、まだキリストを知らない未信者に対してこのことばを用いていました。例えばIテサロニケ4：12では、「外の人々に対してもりっぱにふるまうことができ、また乏しいことがないようにするためです。」と記されています。ですから、監督というのは外の人々・未信者に対しても評判の良い人でなくてはならないということです。また次に出てきた「評判の良い」ということばは字義どおり「良い、すぐれたあかし」という意味で表すことができます。つまり評判が良い人というのは、人々の前で良いあかしを立てている人物のこと、もっと言えば、未信者がその人が歩みを見たときに、この人の歩みはずばらしい、言われるようなあかしをいつも立てているということです。

ここでのポイントは、この人物が立てるあかしというものはどこにあっても変わらない、一貫したものだということです。これは大切なポイントです。要するに、この人物の生き方というのは、日曜日と月曜日から土曜日までの間で変わらないということです。日曜日も月曜日から土曜日も同じ一貫した歩みをするということです。これは非常に大切なことです。なぜなら少し考えてみてください。私たちはこうやって日曜日になるとみんなで集まってきて礼拝を捧げます。みことばを読んで祈ったり、神様のことを考えたり、神様のことに思いを留めて心から賛美を捧げたりします。同じ思いを持った兄弟姉妹たちがともに集えば、ともに神様を見上げて感謝を分かち合ったり、励まし合ったりすることができます。それは私たちにとってすごく感謝なことですね。でもここで問われていることは、教会での礼拝を終えて家に帰った後、月曜日の朝のアラームが鳴って目覚めて、一週間の仕事や学校や家事などが始まった後、どのような歩みをしているかということです。果たして私たちの生き方は、日曜日の礼拝の時と月曜日から土曜日まででは変わってしまうのでしょうか？パウロがここで言わんとしたことは、監督となる者は教会の人々だけでなく、教会外の人々・未信者の前でも変わらず良いあかしを立てる者でなければいけないということでした。日曜日にどんなふるまいをしているかだけでなく、それ以外の日に、どんな歩みをしているのかが問われていました。

でも、これを聞いてある人はこう思うかもしれません。…どうして未信者の評価を気にしなければいけないのか、彼らはキリストのこともみことばのことも知らない、真理を知らないのだから、私の歩み

を理解することなんてできない、だから彼らが何を言おうが、たとえ私のことを非難しようが問題にならないのではないかと。ここで覚えておかなければいけないことは、パウロはそのようには考えていなかったということです。いやむしろパウロは、クリスチャンが家庭や教会の中だけでなく、普段どのようにふるまっているかがその人の本当の姿を表すということをよくわかっていました。だからこそパウロは、周りにいる人々の評価を軽く扱うことをしなかったのです。アレキサンダー・ストライクという先生もこのようなことばを述べています。「未信者はじっと見ていて、抜け目がありません。彼らは仕事場や社会においてクリスチャンがどのような存在かを観察し、言葉と行動との間に相違があれば最初にそれを目にするのです。」周りの人は私たちの普段の歩みを見ています。そして特に、まだ神様を知らない人々の前でどんな良いあかしを立てているのかが、監督にとっては非常に大切なことでした。

## 2. 重要性

では一体、どうして監督は教会外の人々から評判の良い人でなくてはならなかったのでしょうか？なぜそれが教会のリーダーにとって重要なことだったのでしょうか？そのことが7節の後半に記されています。「そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。」パウロはここで二つの理由を挙げていました。

一つ目の理由は、「そしりを受けないため」でした。ここで「そしり」と訳されていることばは、言い換えると「不名誉」や「恥」と言い表すことができます。つまりパウロは、監督が教会外の人々にも評判の良い人でなければ、人々がその人を非難して恥を受けてしまうと警告していました。でもこれは容易に想像できますね。もし、私たちが口では正しいことを言っているながらも、その行いがそのことばを否定するようなものだったとすれば、周りの人、特に未信者はどんなふうにならぬかを見てしまうでしょうか？…この人が教会のリーダーなのか？この人が、クリスチャンとはどのような人なのかということを知っているのか？この人自身がそのようには歩んでいない、ただの偽善者ではないか…このように、その人自身が非難されるだけでなく、語っているメッセージやまた、神様までもが軽んじられてしまうのです。だからこそ、霊的リーダーにとってどんな時も良いあかしを立て続けるということは必要不可欠なものでした。

また二つ目に挙げた理由というのは、その続きですが「悪魔のわなに陥らないため」でした。パウロは言います。もし監督の生活の中に非難されるべきところがあって、人々の前で良いあかしを立てていないのであれば恥を受けるだけでなく、悪魔の仕掛けたわなにかかってしまう、それは非常に危険なことだと。覚えていなければならないことは、サタンは今もいろいろな方法でもって私たちを誘惑し、わなをかけ、そして罪を犯させようと熱心に働いているということです。ペテロもそのことを警告していました。I ペテロ 5 : 8 で「身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを探し求めながら、歩き回っています。」と記していました。サタンは働いて、特にリーダーたちをわなにかけ、罪に引きずり落とそうと誘惑しているのです。だからこそ、霊的リーダーは特に注意している必要がありました。兄弟姉妹の前だけでなく、まだ神様を知らない人の前でも神様に喜ばれる良いあかしを立てているかどうかを監督の条件として問われていたのです。

## 3. 適応

この資格もこれまでと同じように、監督だけでなく私たちひとりひとりにも当てはまることでした。私たちがみことばを見れば、みことばはすべてのクリスチャンがこの世にあって、神様のすばらしいあかしをする者として生きていくことを求めています。例えばピリピ 2 : 14 - 16 で「:14 すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行いなさい。:15 それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中にあつて傷のない神の子どもとなり、:16 いのちのことばをしっかりと握って、彼らの間で世の光として輝くためです。…」とありました。また I ペテロ 2 : 12 では「異邦人の中にあつて、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あ

あなたがたのそのりっぱな行いを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。」と記されていました。こうして神様は繰り返し、私たちがキリストの良い香りを放つあかし人として、どんな時もどんな場所にあっても同じように歩いていくことを求めておられたのです。そうであるなら、そのようなあかしを私たちはきょう立てているのでしょうか？はたして、私たちは周りの人から評判の良い人として見られているのでしょうか？私たちは教会にいる時とそれ以外の職場や学校などにいる時で、同じ人物でしょうか？それとも異なる人物ではないのでしょうか？兄弟姉妹といる時はクリスチャンの顔をして神様のことを話し、未信者といる時はこの世の顔をして神様の忌みきらわれるようなことを進んで行っていないのでしょうか？主を知らない人と同じように考え、同じようなことばを発し、同じようなふるまいをしていないのでしょうか？それとも神様に喜ばれるような主をあかしするものとしての歩みをしているのでしょうか？また、私たちの歩みは、まだ主を知らない人々が主に対する渇きを抱くような歩みでしょうか？そんな歩みを示しているのでしょうか？どうして、あなたはそんなにも揺るがない希望を持っているのですか？なぜそんな満足を持って日々を歩むことができるのですか？そう問われるような歩みを私たちは示しているのでしょうか？それとも、周りのだれもあなたがクリスチャンであることを知らない、そんな歩みではないのでしょうか？イエス様は救われた者としての姿をマタイ5：14－16でこのように言われていました。「：14 あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。：15 また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。：16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなた方の父をあがめるようにしなさい。」あなたがたは世界の光ですと。世界の光になりなさいとは言われませんでした。あなたがたはもう世界の光だと、だからあなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見ることができるようにしなさいと言われたのです。

ここでよく覚えていてください。イエス様はこの箇所で、あなたのことばを人々に聞かせなさいとは言わずに、良い行いを見せるようにと求めていました。つまり私たちに課せられた責任というのは、キリストの福音をただ語るだけでなく、それを実際に生きたあかしとして人々に見せるということです。私たちは口だけの者になったり、自分のうちに持っているその光を隠すのではなく、神様のすばらしさを、行いを通して大胆にこの世で明らかにしていくのです。そしてこれはもちろん、自分自身が人々からほめられるためにするものではありません。自分自身に焦点を集めることのためにするものではありません。書かれていたように、私たちは良い行いをすることによって神様があがめられることが目的になるのです。私たちを救ってくださったすばらしい神様がいて、私たちに希望を与えてくださったすばらしい福音があって、そのことを喜んで伝えていきたいと。そのようにして私たちは機会を探り、まだ暗闇の中にいる人たちに福音を伝え続けていくのです。

確かに、私たちがそのようにみことばに従って人々に福音を伝えようとしても、周りの人はそれを理解してくれないかもしれません。それだけではなく、神様を見上げて歩もうとするあなたのことを色々悪く言うかもしれません。ありもしないようなことや根も葉もないような非難をされたり、ひどい扱いを受けることもあるかもしれません。でも残念ながらそれは仕方のないことです。パウロはテモテに対してこのように言っていました。Ⅱテモテ3：12で「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」私たちがキリストにあって敬虔に生きようとするなら迫害を受けるということは、もう約束されていることだと。でも、それでもなお、私たちは仕返しをしたりするのではなくて、みことばに従い、そのような人たちに対しても愛や赦しを実践していくのです。自ら率先してキリストの良いあかしを立てていくのです。そうすればどうなるかということ、その人たちは私たちの歩みを見て思うようになるのです。…一体どうして、この人は周りの人と同じように怒りに任せて不満や不平を口にしないのだろうか？どうしてこの人はいつも喜んでいられるのだろうか、その理由は、それを生み出している源は一体何だろう？…と。こうして私たちはことばだけでなく、行動を通して福音を



宣べ伝え、人々にキリストのすばらしさをあかしするという責任を、神様からのすばらしい任務を負っています。兄弟姉妹の前だけでなく、まだ主を知らない者のところに出て行って、その前でも変わらずにみことばに従い、そして神様の栄光を現していくことです。そしてこれが最後15個目にパウロが挙げた監督の資格「教会外の人々にも評判の良いこと」でした。

## 〇まとめ

さて、きょう私たちは監督の資格の14個目と15個目をともに考えてきました。監督は救われたばかりの霊的に未熟な、信者になったばかりの者であってはならないということが言われていましたし、また、監督は未信者に対してもいつも変わらない良いあかしを立てる、教会外の人々にも良い評判の者であることが求められていました。これらの基準こそが、教会の霊的リーダーが満たしていなければいけない厳しい条件だったのです。でも同時に、これらは私たちひとりひとりが目指していくべき霊的に成熟した者の姿でもありました。私たちはこのように15個の資格を考えてきました。考えれば考えるほど、私たちは足りない部分や成長しなければならない部分が見えてきたと思います。私自身もこのように色々な質問を皆さんに投げかけていますが、そのことをまず自分自身に考えたときに、この基準というものはるかに高いものであると改めて考えさせられました。もっと言えば、最初にも言いましたが、私たちがこの基準を見ると、だれひとりとしてこの基準を完璧に満たしている者はいないのです。私たちはみな欠けたところがあります。でも私たちはこれらの資格を見ると、私たちがどの点において弱さを覚えているのかということを知ることできますし、私たちがどのようにしてキリストに喜ばれる者になっていくべきなのかということ、霊的に成熟した者とはどのような姿なのかということもこの資格を通して見ることができるのです。皆さん、私たちには必要なみことばが与えられています。私たちには必要な助けも、聖霊なる神様もともにいてくださっています。だからこそ、失敗や罪を犯せば悔い改めて、成長に欠かせないこのみことばを心に蓄え、日々私たちを救ってくださったそのすばらしい主をあかしする者として、今週もともに歩んでいきましょう。